

はじめに

本展示は、前田利家が能登、そして加賀を領有していく時代、両国に存在した城・砦などについて、当館所蔵史料をもって見ていただくものです。

史料の城々は、主として佐々成政との攻防の中で造られたものです。しかし、利家が北陸の地に足を踏み入れた時期に焦点を当てたため、利家とは直接関わらない城館も含めて展示しました。

加賀・能登の城々は、利家による領地支配を保全する役割を担い、その支配が確立していく中で廃城となっていました。

このような城々の興亡は、前田家が加賀・能登及び越中支配をなしていく過程のみならず、戦国時代から江戸時代への歴史の転換を物語るものではないでしょうか。

展 示 品 目 録

- 1 越登賀三州志 古墟考 (写) 寛政 13 年 (1801) 富田景周著 16.84-17
加越能三カ国内の古城跡を各郡ごとに列挙し、考証を記したもの。越登賀三州志は、「韃靼余考」17 巻、「来因概覧」6 巻、当「古墟考」6 巻などから成る地理歴史書。著者の富田権佐景周は 2500 石の加賀藩士で、加越能三カ国及び前田家の歴史・地理に関する著述を多く残した。
- 2 御領内古城略志 宝永 2 年 (1705) 今枝直方著 16.84-129
加越能三カ国の古城跡について、城及び城主の名などを記したもの。今枝民部直方は 1 万 4000 石の加賀藩士。5 代綱紀に仕え、家老役などを務めた。「温故雑録」等の見聞記、「甲戌旅行日記」等の紀行文など多くの著述がある。
- 3 末森記 (写) 年代不明 岡本慶雲著 16.51-2
- 4 末守記 (写) 年代不明 岡本慶雲著 16.51-1
天正 12 年 (1584) の末森の戦いを中心に、加越能国境における利家対佐々成政の攻防を記した軍記。著者の岡本慶雲はもと佐々成政の家臣で、末森の戦い前から利家に仕えたという。当書は、慶雲が越前藩士長見右衛門尉に請われて書きまとめ、送ったものと伝えられている。
- 5 金城北國往還道中図 安政 6 年 (1859) 刊 石田太左衛門著・刊 090-311
金沢から富山を経て江戸に至る下街道を描いた道中図。古城跡名などが記されている。
- 6 加賀越中境諸城里程図 (写) 年代不明 16.51-12
天正 12~3 年 (1584~5)、利家が佐々成政と対陣した頃の加越国境の諸城までの距離を、津幡の小

城山を基点として記したもの。朱色の口印が利家方の城、黄色の△印が佐々成政方の城を示している。

7 加賀国古城之図 年代不明 16.84-136

加賀一国の古城跡を描いた絵図で、墨の線描に山地を緑色、河川湖沼を青色、町・村を黄土色、主要道路を朱線で示している。35 を数える古城跡は樹叢で表現されている。

8 加州大正持城図(「諸国居城之図集」より) 元禄5年(1692) 有沢永貞著 098.6-66-96

「諸国居城之図集」は、全164枚で、五畿七道の諸城または城下を描いたもの。著者の有沢永貞は300石を有し、5代綱紀に仕えた加賀藩士。甲州流軍学に優れ、「甲陽軍鑑註解」など多くの軍学書を著した。また、町見術(測量術)も学び、金沢・江戸間の地理を記した「北道里図」などの著述もある。

9 加州大正持古城之図 弘化2年(1845) 河野正通写 095.33-24

文化3年(1806)写図を写したもの。河野文太郎正通は河野文太郎通義(展示品13・18)の息子。河野家は八家・長家の家臣で、代々武術・兵学などをよくした。当史料館の河野文庫は、河野家が所蔵していた西洋砲術・天文・測量及び絵図を中心とした文書群で、当史料もそのひとつである。

大聖寺城は、錦城山の尾根上に、北から北の丸・二の丸・西の丸・鐘ヶ丸・東丸の6つの郭が連なる連郭式の城郭で、谷を挟んだ両側の尾根筋にも郭が配置されており、堅固な構造をもつ城である。図中の「古城」が旧大聖寺城の跡。「館」は寛永16年(1639)大聖寺藩成立より藩主の館・政庁が置かれた所である。

10 江沼郡月津辺古墟之図 年代不明 16.84-140

月津付近の鶴目左門屋敷跡と古墳を利用して築城を仮想した想定図。この辺りは、一向一揆衆と戦国大名朝倉氏による支援勢力との戦いで、度々戦場となった。

「月津 長亨二年(1488)、富樫政親ノ臣松坂八郎信遠、槻津(月津)ニ至ルニ、賊徒今江久太郎(兼治)是ヲ困ム、其後享禄二年(1529)山田光教寺、黒瀬覚道ヲ攻ント、賊衆三千ニテ着津(月津)ニ逆撃ス、永禄五年(1562)ニハ、朝倉土佐守等此地ニ陣ス」

11 今江村御幸塚古城跡之図 年代不明 16.84-143

12 能美郡今江古城之図 天保15年(1844) 脇田尚方写 16.84-142-1

「今江 御幸塚 初築不詳何人、按ルニ富樫泰高之二居ス、同氏政親長亨二年(1488)滅祀後、泰高野々市城ニ従リ、此城ヘハ賊党抛ト見ヘタリ、天正四年(1576)賊魁内田四郎左衛門林七介等、此城ニ在テ大聖寺城ヲ攻、佐久間盛政、徳山五兵衛、利兵ヲ提来テ御幸塚ヲ陥壘シ、二將此壘ニ抛テ賊ヲ撃、五年十月信長公ヨリ加州ヘ下サル兵子、國中ノ耕作ヲ難ステ、御幸塚ニ普請丈夫ニ為シ、盛政ヲ入レ、又大聖寺ニ普請シテ勝家人数ヲ入置、十月三日北国ノ諸兵帰陳ト大田和泉守日記ニ見ユ(天正)八年勝家御幸塚ニ陳シ、且徳山少左衛門此壘ニ居ス、慶五(慶長5年(1600))ノ役 瑞龍公(利長)大聖寺ヨリ三堂山ニ赴ク時、小松ノ仮成トシテ山崎長徳・奥村栄明・大田長知等ヲ置」

13 石川郡松任城跡図 文化13年(1816) 河野通義写 095.33-3

14 松任古城跡絵図 年代不明 大 1073

「松任 古昔林加賀介貞光ノ二男、松任十郎範光、其子与一範利、其子二郎利家、代々此地ニ住ス、其後賊將鎭木右衛門大夫入道常專居ス、其子右衛門尉頼信、其子勘解由、三世此ニ在城ト云、天正五年（1577）上杉謙信ノ為ニ陥城、頼信之ニ死ス、此後又賊徒此城ヲ攻取カ、若林長門抛ヲ、（天正）八年佐久間盛政・其弟柴田勝政ト謀テ之ヲ殺シ城陥、柴田勝家令シテ徳山則秀此城ヲ守ル、十二年 瑞龍公四万石ヲ太閤ヨリ賜ヒ、此城ニ移リ玉フ、十三年九月 公越中三郡ヲ賜ハリ守山ヘ移玉フコヘ、松任ハ公邑トナル、十五年丹羽長重四万石ヲ、太閤ヨリ賜テ松任城ニ移ル、慶長二年（1597）長重小松城ヘ移レドモ、松任ハ猶長重領分タリ、（慶長）五年浅井役後、神君ヨリ 公ヘ松任ヲモ併賜有テ、是ヨリ我封内トナル、廢城ノ年紀居諸不詳」

15 石川郡安吉古城跡図 年代不明 大 1084

「安吉 大窪源左衛門家長築ク、天文十九年（1550）ヨリ窪田大炊経忠継居ス、天正八年（1580）此城勝家ノ為ニ陥、経忠鬪死、其首安土ニ於テ梟セラル」

16 石川郡鞍ヶ嶽古墟之図 弘化2年（1845）脇田尚方写 16.84-144

「倉岳（鞍ヶ嶽） 富樫氏居恒（ツネ）ニハ野々市ニ館シ、土寇起レハ此城ニ保ミ、巖邑ヲ恃ンテ峻拒スルコトヘ、国俗之ヲ富樫隠居城ト呼リ、然レトモ長亨二年（1488）、富樫政親遂ニ釈賊ノ為ニ這城ニ死シ、城陥、其事状ハ本記ニ詳ス、此後ハ賊魁此城ニ抛ト見ヘテ、天正八年（1580）佐久間盛政、吉野劍鞍嶽四十万ヲ放火ス此時嶽ノ城陥事七国志等ニ見ユ、土人相伝此城ニ賊魁新庄邑ノ杉谷四郎左衛門居スト云ハ、此時成ヘシ」

17 加州犀川之庄鷹巢之城図 大正15年（1926）氏家栄太郎写 13.0-88

18 鷹巢山城跡之図 文政4年（1821）河野通義写 95.33-8

「鷹巢 天正四年（1576）城主ヲ平野神右衛門ト号ス、（天正）五年平野越後ヘ引去、謙信ノ麾下ニ隷ス、八年盛政尾山入城ノ時、此城ヲ重修シ、飛越ノ鎮トシテ柘植喜左衛門ヲ置、十一年ノ頃敦賀八矢ト云者ヲ置、其後松本我摩久ト云坊主ヲ、一・二年置ト云、一説盛政在城、其後拜郷家嘉ヲシテ、勝家之ヲ守ラシム、飛越ノ鎮（オサ）ヘ南ヲ正門トシテ尾山（金沢）ノ番城トス、十二年佐々成政鷹巢ヘ出張縦火、 国祖（利家）出旗之ヲ逐フ、金沢ヨリ三里余ト長湫畧譜ニ見ユ」

19 河北郡松根古城図 年代不明 脇田真興著 16.84-151

20 加州河北郡松根古城図 年代不明 16.84-152

「松根 方人相伝寿永ノ役（寿永2年（1183））、木曾義仲布當ノ地ト云、長亨二年（1488）ニ越智伯耆、其衆四千ヲ率テ此所ニ陣ス、天文十九年（1550）五月游佐統光、松根城ノ州崎兵庫ヲ頼ミ、其将青天小五郎ト、能登ヘ侵入事見ユ、然レバ此頃ハ兵庫ノ居城タル灼然タリ、天正十二・三年（1584・5）ノ比、成政堡ヲ築キ、其将杉山主計ヲ置、加越ノ界戍トス、続本朝通鑑ヲ按ズルニ、天正十三年成政富山ヲ本營トシテ、若干ノ子城ヲ構ヘ、且三十六砦ヲ築ト云者、蓋シ這ノ松根、一乗寺、森、等

皆其数中成ヘシ、又同書ニ成政ノ秀吉公ヘ降服ヲ以テ、我 二公ヲシテ盡ク、成政部下ノ諸墨ヲ取シムトアリ」

21 加州河北郡五ヶ庄朝日山之城跡(写) 明治2年(1869) 大石秀直著 16.84-150

「朝日山 天正十二年(1584) 国祖成政ノ陰謀ヲ知テ、村井長頼ヲシテ築堡ナサシメ、越中ヲ鎮シ、高島九蔵、原田又右衛門ヲ裨將トシ、且足輕大将四隊ヲ副ト云、此後番手ヲ以テ守ルカ、(天正)十三年ノ夏高島ハ阿尾城ヲ守リ、原田ハ俱梨伽羅堡ヲ守ルト云、按此時松根ノ守兵モ引取ナラン」

22 加州河北郡鳥越古城図(写) 寛文2年(1662) 富山六左衛門著 16.84-153

「鳥越 文明・長亨ノ頃(1469~88)、是所ニ一ノ宗旨ノ弘願寺アリ、釈賊ノ兇魁也、天正八年(1580)盛政、末森ノ守將本多三弥等ヲ尾撃シテ弘願寺ニ入トアリ、又今年勝家陥イル諸城ノ中ニ鳥越アリ、七国志ニ見ユ、(天正)十一年 国祖此地ニ築堡シ、目賀田又右衛門、丹羽源十郎等ヲ置テ、加越ノ境戍トス、十二年目賀田・丹羽、成政ニ恐レ、此堡ヲ棄テ逃亡ス、因テ成政久世但馬ヲ置、十三年但馬ヲ引トル」

23 末森城平面絵図(「末森古城図・末森戦斗図」より) 年代不明 097.0-17-3

24 末森戦当時の地形絵図(「末森古城図・末森戦斗図」より) 年代不明 097.0-17-4

25 末森城跡見取絵図(「末森古城図・末森戦斗図」より) 年代不明 097.0-17-2

「末森城 此障徼其古ハ考ベカラズ、天文十九年(1550)五月遊佐美作続光加州松根ノ州崎兵庫ヲ勾引シ能登ヘ襲入ノ時末森城主土肥但馬川尻ヘ出張前途ヲ遮ル事アリ、此時但馬四万石ヲ領ストアリ、是末森城主名見ハル始也、次テ天正八年(1580)柴田勝家加州ノ劇賊ヲ攻撃ノ時佐久間盛政加州車ノ山ヨリ竹橋ヘ出夫ヨリ末森ヲ攻ム、堡主本多三弥西郷新太郎等防クニ堪ス走テ加州鳥越ノ弘願寺ニ入ヲ盛政尾撃スト本記ニアリ、一書ニ今年末森ノ堡主土肥但馬我 国祖ニ隸ストアリ、(天正)十一年但馬柳ヶ瀬ニ於テ戦死ニヨリ 国祖但馬ノ弟伊予ヲ在城セシメ要害ヲ修補アリテ本丸ニ奥村助右衛門、二丸ニ千秋主殿助・瀧沢金右衛門、三丸ニ土肥伊予ヲ置、十二年九月九日佐々成政此城ヲ圍攻シテ鉄桶ノ如シ、然レトモ奥村等墨守ス、十二日 国祖急援越兵解圍シテ去リ城兵万死ヲ脱ス」

26 能州七尾畠山之城図 年代不明 19.9-180

「七尾 是レ古来当国ノ都城也、昔シ此山麓ニ武部判官師澄其後中院少将定清ノ高館皆此所ト封人口碑ス、寔ニ此所ヨリ国分村府中村ヘ二・三町許ノ間ハ国司守護ノ居館アルベキ地位形勝也、畠山修理大夫満則応永五年(1398)能登ノ守護ニ補ラルルヨリ此七尾ニ城ヲ築キ此城ニ義忠・(中略)・義春ト八世相続、義春天正五年(1577)七月此城ニ病死、依テ謙信之ヲ攻、然レトモ遺臣固守シテ城拔ズ、然ルニ遊佐続光謙信ニ内応シテ長綱連父子六人ヲ欺キ殺シ謙信ニ降ル、因テ此城謙信ノ手ニ落チ其将河田豊前・有坂備中ヲシテ城ヲ受取シメ備中ヲ主トシテ直江大和・松川兵部等ヲ置(天正)七年温井景隆・三宅長盛逆威ヲ振ヒ有坂ヲ攻テ此城ヲ奪フ、八年長連龍温井・三宅ヲ金丸菱脇ニ戦ヒ勝ニヨリ三宅潜行シ安土ニ行テ此城ヲ信長公ニ献シ罪状ヲ陳謝ス、故ニ温井・三宅姑ク死首ヲ続テ又此城ニ居ス、九年温井・三宅菅屋長頼ニ阿諛礼遇ヲ厚クシテ此城ヲワタシ各石動山ニ登ル、同年十月菅屋安土

へ帰り 国祖封ヲ能登ニ受此城ニ移ラセラル、然レトモ其頃多クハ越前府中ニ居給フト云、其後七尾城暨ビ城下民屋トモ拳テ今ノ所口村ノ地へ引從サレ小丸山城トナリ城下モ七尾町ト名ケラル」

27 松波城跡之図 年代不明

095.33-37

「松波 松波常陸介代々居ス、按ルニ元祖常陸介義智ハ畠山義統ノ三男ニテ畠山ト称ス、文明六年（1474）三月松波へ入部此郷三千貫余ヲ領ス、其子畠山大隅義成、（中略）其子常陸介義親也、義親天正五年（1577）閏七月七尾陥城ノ時七尾ノ将等ト七尾ヲ去テ神保周防長頼・河野肥前・熊木兵部等ト同意シテ居城松波ヲ守ルトイヘトモ、長沢筑前強攻スルユヘ義親ヲ始メ戦死ス、凡ソ此義親マテ六代百五年松波ヲ領シテ此城ニ居セリ、此子連親所縁ヲ以テ越後称念寺ニ母ト一所ニアリ、長連龍再ビ本領ヲ安堵ノ時連龍ニ隨身、長与六左衛門連親ト称ス、弟義直松波ヲ名乗テ今子孫長家ノ臣タリ、庶流ハ公臣松波重左衛門家は也」

28 穴水古城図 年代不明

095.33-35

29 穴水城図 昭和7年（1932）氏家栄太郎写

13.0-93

「穴水 長谷部信連初メ能登郡ノ熊木ニ住シ後穴水末年大屋庄河原田ニ住ストアリ、是ヨリ長氏歴世ノ間汗隆転居ハアレトモ多クハ此穴水ニ居城タリ、即チ同郷菩提所瑞源寺ニ代代ノ位牌アリ、長氏代々ノ序次ハ信連ヨリ朝連（中略）連龍ト連龍マテ二十一代也、是正統也、弘治元年（1555）謙信能州奥郡ヲ侵ストキ穴水城ノ長統連家士ヲ以テ守防スル事アリ、天正五年（1577）三月謙信七尾城ヲ攻メレトモ拔ズ、因テ統連ノ七尾ニ在テ穴水ハ空間ナルヲ覘ヒ謙信攻奪テ長沢筑前ヲ置、同五月菅田弾正等富木堡ヲ攻陥シ夫ヨリ此穴水ヲ攻メ長綱連モ軍ヲ驅テ攻レトモ堅城ニテ秋七月ニ及ヘトモ陥ズ、閏七月ニ至リ謙信七尾へ軍ヲ向フト聞キ解困シテ連龍七尾へ引入ル、因テ依然トシテ長沢筑前白小田善兵衛之ニ居ス、（天正）六年八月三日連龍再ビ攻テ之ヲ取り一旦此城ニ居ストイヘトモ畢竟越後ノ豪兵ヲ怯レ潜ニ船ニテ遁ル、八年温井下総此城ニ抛ヲ連龍圍攻シ下総越後へ走ル、此後穴水ノ事書記ニ見ヘス」

* 史料引用は「越登賀三州志 故墟考」による。（ ）内及び句読点・書き下しは一部付け加えた。

加 賀 ・ 能 登 古 城 跡 一 覧

番号	城 名	解 説	現 在 地	展示品
①	松波城	能登守護畠山氏が築城。天正5年(1577)上杉謙信軍により落城。	珠洲郡内浦町 松波	27
②	穴水城	穴水平野を一望し、穴水湾に接する天然の要害。南北朝時代から天正8年(1580)の利家能登領有まで、長氏による領域支配の拠点であったと伝えられる。	鳳至郡穴水町 川島	28・29
③	崎山城	有力国人三宅氏の居城。三宅氏は天正10年(1582)、荒山合戦で前田方に背き、滅ぼされた。落城もこのころと推測されている。	鳳至郡能都町 宇出津	
④	棚木城	天正年間、上杉氏の家臣・長景連の居城。天正10年、織田方の武将で一族の長連龍に攻められ、落城。	鳳至郡能都町 宇出津	
⑤	荒山城	標高486mで眺望に恵まれている。七尾城主畠山氏が天正5年に築城。荒山合戦では石動山衆徒側が出城を築く最中に攻められ、討死した。	鹿島郡鹿島町 原山	
⑥	勝山城	石動山のふもと、標高210mの丘陵上にあった。天正12年(1584)、佐々成政の命を受け、越中の守山城主新保氏が七尾城の押さえとして築く。同年、前田安勝により攻め落された。	鹿島郡鹿島町 芹川	
⑦	二穴城	能登島の南東部先端にあり、七尾西湾を航行する船舶を監視できる要衝の地。天正9(1581)年、利家が家臣を置いたといわれる。	鹿島郡能登島 町二穴	
⑧	小丸山城	標高22mの小丸山に立つ平山城。七尾城、石動山を望むことができ、東西に流れる川が自然の防備線となっていた。天正10年、利家が能登支配の拠点とすべく築城。しかし同11年、秀吉より加賀二郡を加増され、金沢城へ移っている。その後、利家兄・安勝、利家二男・利政らが置かれるが、元和の一国一城令により廃城となった。	七尾市馬出町	
⑨	七尾城	東西2・5kmに及ぶ大規模な山城。標高300m。畠山氏繁栄の拠点となった。天正9年、能登に入府した利家は、まず羽咋郡菅原(現・志雄町)に居住したあと七尾城に移っている。しかしその後、本城を小丸山城に移したため、当城は廃棄された。	七尾市古府・ 古屋敷	26
⑩	末森城	加賀・越中・能登の要衝に位置し、畠山氏の家臣土肥氏が居住していた。のち利家は家臣奥村永福を置く。天正12年、末森の合戦で佐々成政軍の猛攻を受けたが、退けた。	羽咋郡押水町 竹生野・南吉 田	3・4・23・ 24・25
⑪	富木城	畠山氏の支城。天正9年、信長が能登を領有した際、その家臣・福富行清が配された。	羽咋郡富来町 八幡	
⑫	龍ヶ峰城	土豪村上氏の居城であったと伝えられる。天正12年、佐々成政が加賀攻略の出城とするが、利家配下の前田秀継父子に攻め落とされた。	河北郡津幡町 山森	
⑬	横根城	一乗寺城ともいう。加越国境に位置し、南北朝の戦乱の折、戦場となっている。天正年間(1573～91)には、佐々成政の家臣が置かれたと伝えられている。	河北郡津幡町 北横根	
⑭	鳥越城	天正11年(1583)、利家の家臣が置かれるが、翌年佐々成政に攻められ落城。以後当城をめぐる合戦が行われた。	河北郡津幡町 七黒・倉見	
⑮	朝日山城	戦国時代、一向一揆衆が籠ったという。天正12年、利家が佐々成政の攻撃に備えるため、家臣村井長頼等を配置した。	金沢市加賀朝 日町	21
⑯	鞍ヶ嶽城	加賀国守護富樫氏が築城したといわれる。天正8年、柴田勝家が加賀に打ち入った際、攻め落とされたという。	金沢市倉ヶ岳町	16
⑰	鷹巣城	鷹巣山山頂に位置する山城。飛騨・越中方面への備えとして、加賀を領有した佐久間盛政・前田利家が、配下の武将を置いた。天正13年(1585)、佐々成政により攻撃されたが、撃退している。	金沢市西市瀬・ 瀬領町	18・17

⑱	高峠城	利家と共に越前府中に封ぜられた、不破彦三の居城と伝えられる。	金沢市小二又町	
⑲	松根城	標高308mの山城。加賀・越中の通路を押さえる要所にあった。戦国期、一向一揆衆の居城の一つ。朝日山城と共に、佐々成政と利家の国境攻防戦における重要地点であった。	金沢市松根町	19・20
⑳	松任城	鎌倉期には林氏、戦国期には一向一揆の将・鎬木氏が居城したという。天正11年、利長が秀吉から松任四万石を与えられ同13年まで居城。後に秀吉の直轄地となったが、慶長5年(1600)再び利長に与えられ、城代の赤座吉家が在城した。	松任市古城町	13・14
㉑	安吉城	一向一揆衆の武将・安吉源左衛門の築城といわれる。天正8年、柴田勝家軍により落城。	松任市安吉町	15
㉒	虚空蔵山城	天正年間、加賀一向一揆衆の将・荒川市助等が在城したと伝えられる。天正8年、信長方の佐久間盛政の攻撃により落城。	能美郡辰口町 和気・館	
㉓	和田山城	北加賀・南加賀の境界に位置する要衝の城。一向一揆衆の和田超勝寺が在城。のち佐久間盛政配下の安井左近が置かれた。慶長5年、小松・大聖寺両城への備えとして、利長が修復したと考えられている。	能美郡寺井町 和田	
㉔	鳥越城	標高312mの山頂にあり、白山麓の一向一揆衆の軍事的拠点。二曲城と共に、加賀における一向一揆平定戦の最後の戦場となった。天正8年、織田軍の攻撃により落城。その後一揆衆が一時奪還するが、同10年、佐久間盛政の攻撃で一揆勢は壊滅した。	石川郡鳥越村 三坂・別宮・釜清水	
㉕	二曲城	石山合戦が始まると要塞化が進み、鳥越城の支城として、能美平野へ抜ける三坂峠を押さえる役割を果たした。	石川郡鳥越村 出合	
㉖	舟岡城	一向一揆衆の拠点だったが、織田軍により落城。天正11年より、利家が高島定吉を配した。	石川郡鶴来町 八幡町	
㉗	小松城	一向一揆の武将が築城。慶長5年、浅井嘯の戦いで城主丹羽長重が利長に敗れた後、前田家により城代が置かれた。堀に梯川の水を取り入れており、万一の際は堰きとめて一帯を湖のようにしたと伝えられ、「小松の浮城」とも呼ばれた。	小松市丸の内町	
㉘	千代城	一向一揆の武将が築城。天正8年、柴田勝家が拝郷家嘉を置き、慶長5年には利長が砦として使用したという。	小松市千代町	
㉙	波佐谷城	一向一揆の武将が築城。天正8年陥落し、信長の臣で小松城主に任じられた村上勝頼の縁者・村上勝左衛門が置かれた。	小松市波佐谷町	
㉚	御幸塚城	戦国期、一向一揆衆と越前朝倉氏との攻防が繰り返された。一向一揆制圧後、信長は家臣の柴田勝家に城を守らせている。慶長5年、関ヶ原の戦いの際には、利長が西軍勢力を抑えるため、家臣を布陣させた。	小松市今江町	11・12
㉛	大聖寺城	錦城とも呼ばれ、標高70mの錦城山にある。戦国時代には一向一揆衆の拠点となった。慶長5年、関ヶ原の前哨戦として利長により大聖寺城攻略が行われ、落城した。元和の一国一城令で廃城となる。	加賀市大聖寺 地方町	8・9
㉜	松山城	一向一揆衆の居城。のち佐久間盛政の将・徳山則秀が在城したと伝えられる。慶長5年、大聖寺城攻めに向かう利長が本陣を置いたという。	加賀市松山町	
㉝	津幡城	旧北陸道と能登街道が分岐する交通の要所にある。源平、南北朝、戦国のそれぞれの戦乱の舞台となった。天正11年、利家による越中攻めの拠点として弟・秀継が配されている。同13年、佐々成政が降伏すると、廃城となった。	河北郡津幡町 清水	

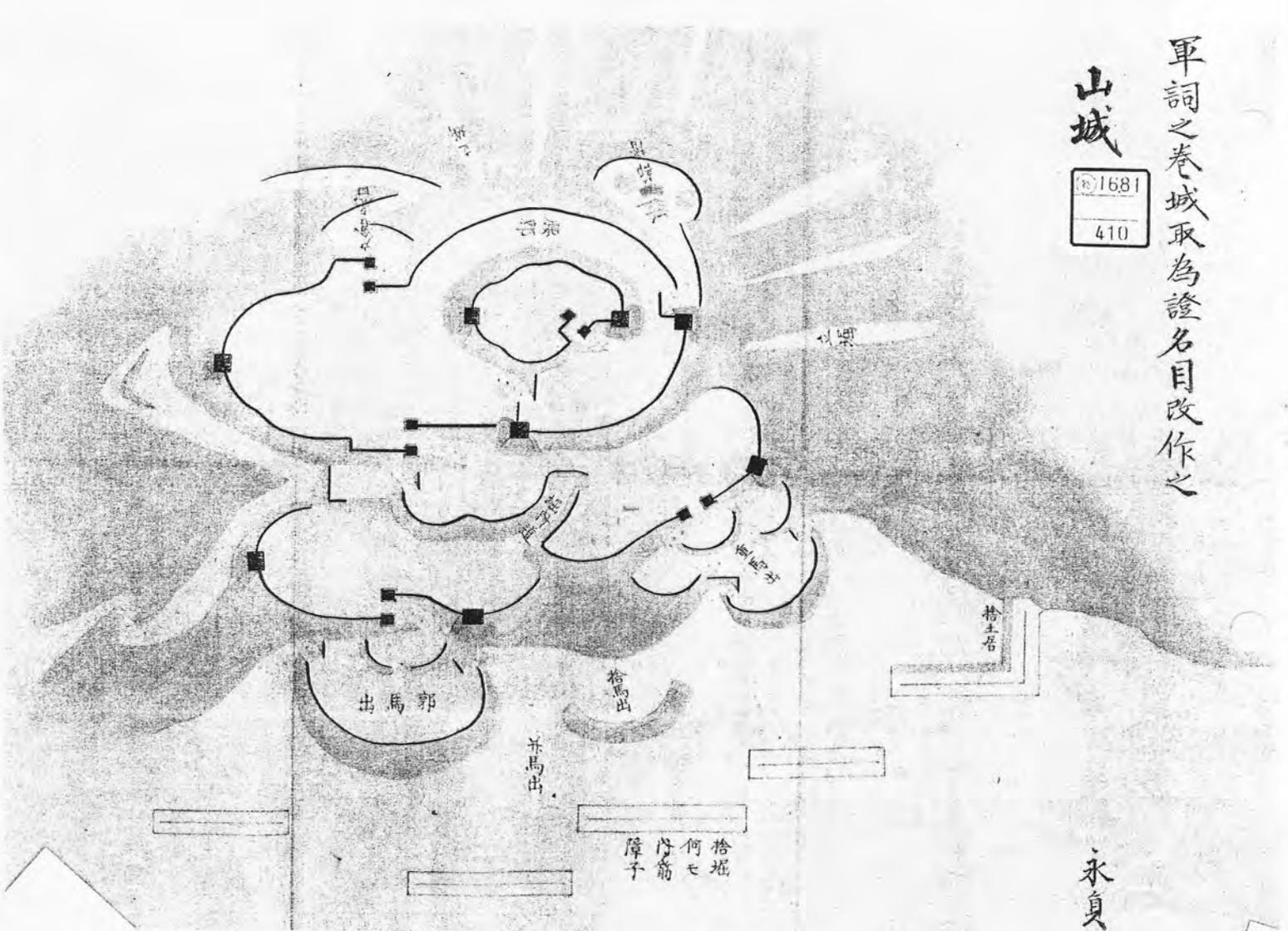
加賀・能登古城跡分布図



軍詞之卷城取為證名目改作之

山城

1681
410



永貞